

氏 名	川田虎男
学 位 の 種 類	博士（社会デザイン学）
報 告 番 号	甲第 595 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	ボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響と支援者の 役割～ボランティア概念が孕む矛盾点に着目して～
審 査 委 員	(主査) 中村陽一 (立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科 教授) 大熊 玄 (立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科 准教授) 粉川一郎 (武蔵大学社会学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序章 本論文の背景.....	5
第1節 ボランティア活動の現代的役割・意義.....	5
第1項 ボランティアの役割と期待.....	5
第2項 ボランティア活動の教育的意義	6
第3項 ボランティア活動の現状について.....	10
第2節 ボランティアの概念	11
第1項 ボランティアの原則とそのゆらぎ.....	11
第2項 概念変化の類型とボランティアの<終焉>.....	12
第3節 先行研究の整理.....	13
第1項 学生ボランティアに関する先行研究.....	13
第2項 先行研究の課題.....	16
第4節 研究の目的と枠組み	17
第1項 本研究の目的.....	17
第2項 本研究における分析の枠組み.....	18
第3項 用語・概念の定義	23
第5節 序章小括.....	27
第1章 学生ボランティアと活動者への影響	29
第1節 大学生の固有性と自己形成	29
第1項 大学生の固有性とボランティア活動.....	29
第2項 大学生の自己形成	30
第3項 人格と主体形成.....	32
第2節 学生ボランティアを巡る状況.....	34
第1項 学生ボランティアの歴史	34
第2項 学生ボランティアを巡る政策動向.....	36
第3項 学生ボランティアと「動員」のリスク	40
第4項 大学生のボランティアへの動機と特徴	42
第5項 大学におけるボランティア活動の位置づけ.....	45
第3節 大学におけるボランティア支援の特徴とボランティアコーディネーターの役割	45
第1項 歴史的背景（大学ボランティアセンターと支援のあり方についての変遷）	46
第2項 ボランティアコーディネーターの機能	47
第3項 大学におけるボランティア支援の特徴	48

第4項 先行研究に見る自己形成を促す支援のあり方	49
第5項 ボランティアの抱える矛盾から捉える先行研究の課題.....	52
第4節 第1章小括.....	53
第2章 ボランティア活動による学生自身への影響と自己形成	56
第1節 調査の概要.....	56
第1項 調査の目的	56
第2項 調査協力者の選定	56
第3項 倫理的配慮	57
第4項 質問項目の内容.....	57
第5項 調査方法.....	57
第6項 調査の意義と限界	58
第2節 調査の結果.....	58
第1項 調査協力者の属性とインタビュー結果	58
第2項 見いだされたボランティアの矛盾.....	61
第3項 自発性における矛盾と自己形成への影響～受動的態度から自発的・積極的 態度への変容～.....	62
第4項 社会性における矛盾と自己形成への影響～利他性と利己性の接近と合理的 利他性の発見～.....	75
第5項 無償性における矛盾と自己形成への影響～ボランティア的態度と資本主義 社会との葛藤と生き方への問いかけ～.....	88
第3節 第2章小括.....	95
第3章 ボランティア活動による自己形成を促す支援.....	98
第1節 学生インタビューから見えるボランティアコーディネーターの影響.....	98
第2節 調査の概要.....	100
第1項 調査の目的	101
第2項 調査対象者の選定	101
第3項 倫理的配慮	101
第4項 質問項目の内容.....	102
第5項 調査方法.....	102
第3節 調査結果.....	102
第1項 調査対象者の属性	102
第2項 学生との関係性とコーディネーターとしての姿勢	102
第3項 教育的視点から見る支援の在り方.....	105
第4項 矛盾したボランティアにおける自己形成と支援の在り方	110
第4節 第3章小括.....	125
終章 結論と今後の課題.....	127

第1節 第1章総括～学生ボランティア研究の現在地～	127
第2節 第2章総括～矛盾を孕むボランティアを通した活動者自身への影響～.....	129
第3節 第3章総括～学生ボランティアの自己形成を促す支援～.....	131
第4節 本研究全体の総括と意義.....	132
第1項 矛盾を抱えたボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響.....	133
第2項 大学生の自己形成に寄与する支援のあり方.....	138
第5節 今後の研究課題と展望.....	140
引用・参考文献	141

(2) 論文の内容要旨

本研究は、ボランティアの持つ矛盾点に着目し、ボランティア経験者によるインタビュー調査からボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響について研究を行ったものである。ボランティア概念は、「自発性」「社会性」「無償性」の3原則と呼ばれる特徴があるとされているが、その定義の曖昧さが指摘されてきた。そこで、ボランティアを単に狭い原則論にとどめるのではなく、あえて矛盾を孕むものとして定義づけることで、よりリアルなボランティアの姿、そしてそこに関わる学生達の成長や自己形成への影響について明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の2点について検討が行われた。

①矛盾を抱えたボランティア活動が、活動実践者である大学生の自己形成に与える影響を明らかにする、②大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものかを検討する

矛盾を抱えたボランティア活動が活動実践者である大学生の自己形成に与える影響について、インタビュー調査より以下の3点を見出すことができた。

(1) 自発性における矛盾と自己形成への影響

自発性がその原則となるボランティア活動だが、実際の所最初から高い自発性をもって活動に取り組む者は多くはない。インタビュー結果をまとめ以下のようなモデルを提示した。

- ① 活動前のステージ
- ② ボランティア活動への参加（多様な参加動機）のステージ
- ③ 指示されたことを行う受け身の活動ステージ
- ④ 活動からの学びを糧に既存の活動を修正・運営するステージ
- ⑤ 自ら課題を発見しその解決に向けて活動を生みだすステージ
- ⑥ 自分自身の軸を定め、自分自身の人生を歩むステージ

また、これらのステージの変化が起きる要因としては、(1) 震災の被害の実感、(2) 省察の機会、(3) ロールモデルの発見、(4) 活動を通した過去の意味づけの変化、(5) 活動を通した承認（評価）の5点を指摘した。

(2) 社会性における矛盾と自己形成への影響

調査から、利他性×利己性の矛盾から出発した動機は、互いに近接し「自分のためであり、かつ他者の為でもある」「他者の為に行うことが、結果自分のためにもなる」といった相互浸透や合理的利他性へと合流を果たしていることが読み取れた。

(3) 無償性における矛盾と自己形成への影響

ボランティアの持つ「無償性」の原理は、自由競争により利益を追求していく資本主義社会においては、その存在自体が矛盾ないし対立を孕む関係になる。調査からも、過剰に利益を追求する企業の中においては、強い葛藤を抱える結果にもつながることが示唆された。この葛藤状態について、ボランティア活動による自己形成として、人間優先の価値観と社会変革に向けた萌芽を見ることができた。

次に、大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものか明らかにするため、調査対象の学生の支援に関わった2名の支援者（ボランティアコーディネーター・専門職）にインタビューを実施し検討した結果、以下の4点を見出すことができた。

(1) 学生との関係性とコーディネーターとしての姿勢

コーディネーターの役割については、「自己決定の尊重」「受容」「非審判的態度」「肯定的なフィードバック」「活動の結果以上にそのプロセスを重視する」「様々な場面での問かけによる振り返りの機会」「活動を行う上での環境整備」といった共通の姿勢を読み取ることが出来た。

(2) 教育的視点から見る支援の在り方

パウロ・フレイレの教育理論から考察を行ったところ、コーディネーターの姿勢からは「課題提起型教育」において重視される、【双方向のコミュニケーション】【教育する側とされる側は対等な関係】【教育する側は単に教育するだけでなく、教育される者との対話を通じて自らが教育しながら教育される。】【お互いが主体となるやり方であり、成長の経験となる】等の要素を読み取ることができた。また対話的教育に繋がる視点として、【省察の重視】【対話の前提としての愛、謙虚さ、人間への信頼】を読み取ることが出来た。

(3) 矛盾したボランティアにおける自己形成と支援の在り方

- ① 自発性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、受動的な姿勢から積極的な姿勢への変化の過程において、コーディネーターとしては「実行力」と「意欲」という視点から学生を捉え、その学生の段階に応じて関わり方を変化させていることが明らかとなった。
- ② 社会性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、利他性（公益性）、利己性（私益性）それぞれに学びを得られるプログラムを提供していることが確認された。また、活動時の省察を通して、活動者の気づきや学び成長を促すと共に、より公益性の高い活動への動機づけなどに繋げていることを指摘した。コーディネーターの学生への承認は、「活動時の評価」に留まらず、存在そのものへの承認をも含まれるものであることを指摘した。

- ③ 無償性における矛盾と自己形成における支援者の役割では、インタビュー対象者の社会に対峙する姿勢の形成過程を確認し、コーディネーターの関わりに「対話的教育」を見ることができた。その結果、インタビュー対象者の現実社会に対する批判的視座が磨かれていった可能性を指摘した。

以上にもとづき、本論文の結論と課題としては以下のようにまとめられている。

(1) 3つの矛盾点の関係性

自発性・社会性・無償性がそれぞれ抱えている矛盾点は相互にどのような関係性になっているのかについて検討を行った結果、①自発性の矛盾（自発性×受動性）は自己内の矛盾②社会性の矛盾（利他性・公益性×利己性・私益性）は自己と他者との間に生じる矛盾、③無償性の矛盾（資本主義社会との矛盾）は社会システムとの間に生じる矛盾として整理することができた。

(2) 矛盾するボランティアの自己形成への影響

自発性の矛盾である「自発性×受動性」による自己形成への影響について検討した結果、ステージごとに、責任を引き受け、葛藤を背負いつつも、被害の実像を知る中でより強い使命感を持つことや、振り返りの機会による気づき、ロールモデルの発見、活動を通したネガティブな過去の経験の意味づけの変化などを通して、より積極的な姿勢に変化していったと考えることができた。

また、社会性の矛盾である「利他性・公益性×利己性・私益性」による影響は、利他性から利己性・私益性への気づきと変化であり、かつ利己性から利他性・公益性への気づきと変化でもあった。両者は相互浸透しつつ接近するというプロセスをたどり、「情けは人のためならず」という合理的利他性への合流を果たすと考えられた。

(3) 矛盾するボランティアによる自己形成への影響の全体像

自己形成には、「自己に気づく」段階と「意識的に自己を構築する」段階がある。自発性の矛盾による自己形成においては、①～⑥のモデルの内①～⑤が「自己に気づく段階」、⑥が「意識的に自己を構築する」段階にあると考えられる。社会性の矛盾による自己形成においては、他者から承認を得る段階が「自己に気づく」段階であり、他者に対する承認の段階が、「意識的に自己を構築する」段階として捉えることができる。

また、鈴木の人格論を援用しつつ、ボランティア活動による自己形成への影響の全体像について検討した結果、自発性の矛盾（自発性×受動性）における自己形成において、自己実現の過程を見いだすことができた。さらに、社会性の矛盾において、相互承認の過程を見出すことができた。以上のことから、本研究ではボランティア活動による自己形成への影響の全体像として、主体形成の過程であるとの結論を得た。

(4) 大学生の自己形成に寄与する支援のあり方

次に、大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものを検討した結果、以下の4点に集約することができた。

1. 矛盾したボランティアを受容する姿勢
2. 学生一人一人にあったコーディネーション
3. 学生を主体として扱う関わり方（自己決定の尊重）
4. 問いかけによる振り返りの機会

(5) 今後の研究課題と展望

最後に本研究の課題については、第一に調査手法による限界、第二に調査対象者の限定、第三にボランティアの抱える矛盾の限定性を指摘した。その上で、今後の研究への展望として、第一にさらなる事例の蓄積、第二により長期的視野での学生時代のボランティア活動の影響についての調査、第三に学生ボランティアの支援における研究においては、まだまだその蓄積が行われていない分野となっているため、本稿での知見をベースにしつつ、学生との面談時のケース検討や他の実践事例を蓄積することで、学生ボランティア支援におけるボランティアコーディネーターの専門性について、より明確化していく必要があることを指摘した。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、ボランティア活動の持つ矛盾点に着目し、ボランティア経験者によるインタビュー調査からボランティア活動が大学生の自己形成に与える影響について研究を行ったものである。

ボランティア活動の概念は、「自発性」「社会性」「無償性」の3原則と呼ばれる特徴があるとされているが、これまでその定義の曖昧さが指摘されてきた。そこで、ボランティア活動を単に狭い原則論にとどめるのではなく、あえて矛盾を孕むものとして定義づけることで、よりリアルなボランティア活動の姿、そしてそこに関わる学生達の成長や自己形成への影響について明らかにしようとするところに本論文の特徴がある。

具体的には、以下の2点について検討が行われている。

- ①矛盾を抱えたボランティア活動が、活動実践者である大学生の自己形成に与える影響を明らかにする。
- ②大学生の自己形成に寄与する支援のあり方はどのようなものを検討する

(2) 本論文の評価

本論文においては、先行研究が過不足なく押さえられ、従来のボランティア研究に付き

まっていたボランティアの正当性やポジティブな側面のみに特化したアプローチではなく、その矛盾や両義性を正面から見据えるものとなっている。

そのうえで、矛盾を抱えたボランティア活動が活動実践者である大学生の自己形成に与える影響について、インタビュー調査をもとにしつつ、両義的な側面をバランスよく分析した手堅い研究といえる。

すなわち、自発性・社会性・無償性それぞれにおける矛盾と自己形成への影響について、支援者の役割も併せ、検証しようとしている点に、本研究のこの分野における先行研究への適切な理解と、そこで提示される必ずしも平易ではない諸課題への真摯な研究アプローチが見られる点が、審査委員会でも高く評価された。

もちろん、申請者自身も自覚している諸課題がないわけではなく、今後、さらに定量的な裏付けを求めたり、海外との比較を試みたり、また今回中心となっている復興支援活動以外の分野に取り組んだりといったことにより、本研究で示された重要な論点をさらに深く探究していくことが求められるが、それは本論文の欠点ではなく、むしろ本論文の成果に基づき発展的な研究の方向性として出てくるものととらえることができるというのが、審査委員会としての総合的な意見であった。

上記により、審査委員会としては本論文が社会デザイン学研究として博士学位の水準に十分に達したものであると判断するものである。